聖ホセマリアの生涯 - 49

1940年代の初頭、オプス・デイはス ペインの色んな都市にも広がり、マ ドリードでは複数のセンターが生ま れました。聖ホセマリアは、これら のセンターの管理(家事一般から建 物の管理)の仕事を女子メンバーの 一部が専門的に受け持つように望ん でいました。女子メンバーも多様な 仕事を持つはずですが、まだその数 は少なく、当初は全員がこの仕事に 当たらねばなりませんでした。神父 は、姉のカルメンの手を借りて最初 のメンバーに管理部の什事の重要性 から実際のやり方まで教えていきま した。

1943年、マドリード大学の近くにモンクロアという学生寮ができました。ここでは三人の女子メンバーが中心になって働き、管理部の養成所のようになりました。夏の間に内装や工事を終えるはずでしたが、種々

の困難によって、10月の新学年の開始以降も工事は続きました。建物は道を挟んで二つ分かれ、食堂と食糧倉庫が別々、百人近い寮生など、管理部の仕事は困難を極めました。最初は希望に胸を膨らませて働いてストンバーたちも、クリスマと冬休みが近づいたころには疲れ果て、落胆してしまいました。

12月23日、聖ホセマリアが一足早い クリスマスのお祝いを言うために ひょっこり現れました。姉からのプ レゼントをもって。三人はこのとき とばかり仕事大変さを訴えました。 そして「あまりにも仕事が多いの で、祈る時間がありません」と言っ たのです。突然神父は手で顔を覆っ て嗚咽を始めました。皆驚いて黙っ てしまいました。しかしすぐに神父 は顔を上げて、プレゼントの包装紙 をちぎって何やら書き始めました。 それは彼女たちが訴えた困難(手伝 いなし、労働者が一杯、食料の貯蔵

なし、経験なしなど)で、その下に 「神への大きな愛。神とパドレへの 信頼。明日の黙想会が終わるまで困 難は考えない」とありました。神父 は後で「あのとき泣いたのは、あか たたちが祈りをしていなかったから です。オプス・デイの人にとって も大切な仕事は祈ることだからで す」と教えた。

彼女たちは黙想会での神父の説教に励まされ、落ち着きを取り戻しました。年が明けると工事も終わり、徐々に仕事の環境も改善されていきます。しかし、まだ管理部の仕事を専門的なレベルにするには時間がかりました。

尾崎明夫

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/sei-josemaria-49/ (2025/12/15)